



ハンディなまとめの書

「リハビリテーション便覧」

小池 文英編集

リハビリテーション医療が対象とするものは、原因疾患の多様性や社会的要素など、多くの問題をはらんでいるので、従事する私どもはいつも終着点のない道を歩いている感をもっている。

この書の特徴を敢えて分析してみると、まずはじめに、日本の現状でリハビリテーション医療がどんな位置にあるかを、はっきりと示されていることが注目される。これは他の人達に対しての啓蒙の第一歩であると同時に、私どもの覚悟の確認でもあろう。

また、原因疾患別に各部門の専門家である執筆者がたの簡明な解説があり、技術面での指導と示唆を与えられる。これも外部に対しての説明としても、一方リハビリ

テーション医療チーム内での相互理解にも有効であろう。

さらに特に感じたことは、私どもの医療の目標として社会復帰については、すべての分野で絶えず根気のある形づくりが要求されるが、この点で社会的な資料（たとえば法令、施設一覧など）の集約がなされていることである。私どもが求めるのに困難な点を整理されているのがありがたく、ソーシャルワーカーとして従事している人達にも実用性のあるものであろうし、専任従事者のいない施設ではこの企画がさらに貴重なものであろう。この意味では、リハビリテーションセンターのない医療機関にも是非すすめたい書である。

最後にこの書の目的が、ハンデ

ィなまとめにあると思われるから、特に技術面での深い掘りさげを要求されることは無理であろう。しかし明解なまとめがこの面を補うに十分であり、特にわが国の社会的背景を基としたリハビリテーション医療の集約としては、ほかに適当なものがないだけに、この企画に対して大きな敬意を表したい。

私ども従事者がハンドブックとして手もとにおけば、絶え間ない歩みを力強く踏むことができそうな感じの書である（A5、570ページ、¥3000、医歯薬出版）

（関東労災病院理学診療科部長
本多 純男）